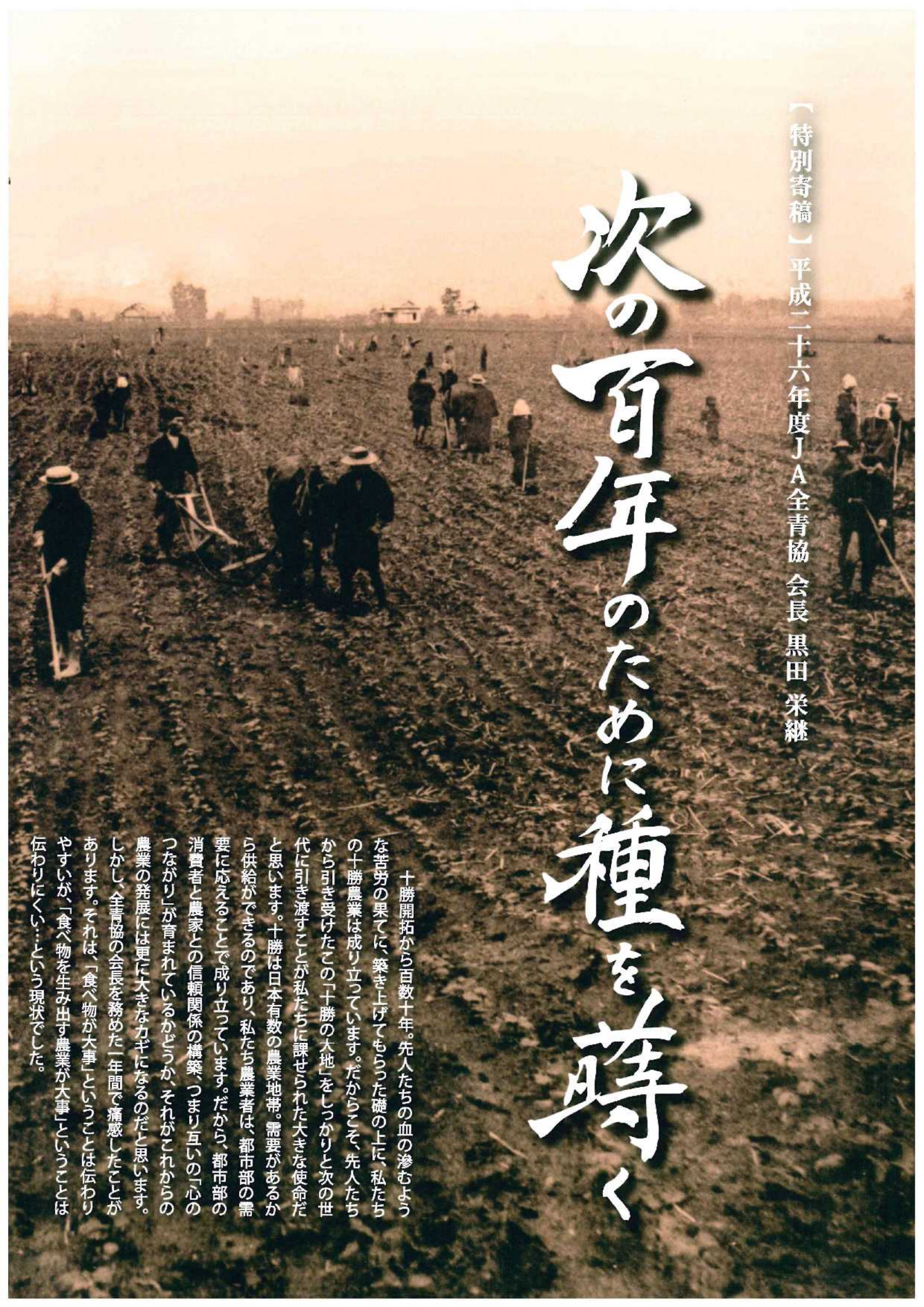
とかち農村ホームステイ



【特別寄稿】平成二十六年度ＪＡ全青協 会長 黒田 栄継

次の百年のために種を蒔く

十勝開拓から百数十年。先人たちの血の滲むような苦労の果てに、築き上げてもらった礎の上に、私たちの十勝農業は成り立っています。だからこそ、先人たちから引き受けたこの「十勝の大地」をしっかりと次の世代に引き渡すことが私たちに課せられた大きな使命だと思います。十勝は日本有数の農業地帯。需要があるから供給ができるのであり、私たち農業者は、都市部の需要に応えることで成り立っています。だから、都市部の消費者と農家との信頼関係の構築、つまり互いの「心のつながり」が育まれているかどうか、それがこれからの農業の発展には更に大きなカギになるのだと思います。しかし、全青協の会長を務めた一年間で痛感したことがあります。それは、「食べ物が大事」ということは伝わりやすいが、「食べ物を生み出す農業が大事」ということは伝わりにくい…という現状でした。

三世代前、つまり今から七～八十年前は、国の全就労者人口における農業者の割合が五十％以上もあったことが象徴するように、国民のほとんどが農業者とつながっていました。だから、その時代に例えば新聞で「農家」という言葉を見れば、それぞれのつながりの中で思い浮かべられる親戚や知り合いの顔があったのだと想像します。そして、その頃は当たり前のように農業の大切さが伝わっていたのだと思います。食べ物がなければ生きていけない、また、それらを生み出す農業は生きていくためには欠かせない大事な営み。そんな当たり前のことが当たり前のように伝わる土壌がこの頃にはありました。しかし、いま現在はその割合もたったの四％。たった七～八十年の間に五十％から四％になってしまいました。四％ということは、農村・農業は残念ながら国民全体から見て身近になく、農家との心のつながりもないということです。そこを嘆くのではなく、そこと真摯に向き合うことがいまこそ必要です。国民の大半が農業者になり、昔のように戻るのはおそらく無理です。でも昔のように、農村、そしてそこで暮らす私たちと都市住民の間に「心のつながり」を育むことはできるかも知れません。昔のように国民の過半数以上に心から「農業」は命の糧を生み出す大切な営みなのだと感じ、考えてもらえるような仕組みを今こそ作らなくてはなりません。では、私たちは、どのようにして多くの人たちと心のつながりを育むことができるのでしょうか？

※次頁に続く

農村ホームステイを行う理由

現在十勝では大阪・東京を中心に都市部に住む高校生たちを「農村ホームステイ」として受け入れています。農業者宅でのたった一泊の農村ホームステイ。夕飯を一緒に食べ、家族と一緒に団らんし、日々の当たり前の農作業や仕事の手伝いをしてもらう。まるで家族の一員のように、同じ時間を過ごす。その後、その高校生は「農家」という言葉を聞けば、受け入れた私たち農家の顔を、「農村」という言葉を聞けば十勝の農村風景を、食を生み出している広大な大地を思い出してくれると思います。

現在、年間三千人の高校生を十勝管内約五百戸の農家で受け入れています。でも十勝には、この十倍以上の数の農家があります。もし一年に一度、農業者みんなで受け入れることができたなら…そんな取り組みを十年続けたなら…どんな未来が待っているだろうか。ここで育まれた家族のようなつながりは、十勝の未来の可能性を示してくれるのではないだろうか。きっと、食べ物が大事。食べ物を生み出す農業が大事。そんな当たり前のことが、当たり前に伝わる土壌はこんな風に作られるのではないかと思うのです。

高校生の涙と農業者自身の気づき

ありのままの生活体験では、農業者と都会の子どもたちの間に家族のようなつながりが育まれる。作業体験だけでなく、日帰り体験でもない、泊を伴った「生活体験」だからこそ、「心のつながり」が育まれる。でも「泊」を伴うと受け入れは、結構大変です。とくにお母さんたちは大仕事。でも泊を伴うからこそ、意義があると思っています。家族のようなつながりが生み出されるには、農業見学や農業体験だけでは正直難しいです。私たち農業者と寝食をともにする「ホームステイ」だからこそ、伝わることがあるのだと思います。また、この「農村ホームステイ」ですが、たった一泊なのに、高校生たちが別れ際に涙する場面をよく目にします。毎回ということではないですが、涙の別れ、高校生たちの純粋な涙に触れると、こちらも一緒に涙ぐんでしまうんですよね…。また、受け入れた後、高校生たちからお礼の手紙や思い出を綴った色紙が届くので、いつも楽しみにしています。そしていつも思うのですが、我々にとっては極々当たり前の農村の「風景」だったり、普通の日常の「作業」だったりに、高校生たちは感動する。つまり私たちが住んでいる場所や営みは、人を感動させる魅力や価値があるんじゃないかって。これって、ちょっと恥ずかしいですが、高校生たちから学んだことです。農村ホームステイは、私たち受け入れ農家にとっても大事な気づきの場なんだと思います。

食の絆を育む会の意義とJAと連携する必要性

現在は十勝の農村ホームステイは、管内にある十二団体で構成されているNPO法人食の絆を育む会が運営主体となっています。それぞれの団

平成26年度ＪＡ全青協 会長

黒田 栄継（くろだ よしつぐ）

1976年北海道芽室町生まれ。98年に愛媛大学を卒業後、就農。JAめむろ青年部部長、十勝地区農協青年部協議会、北海道農協青年部協議会、東北・北海道農協青年部協議会の会長、JA全青協理事を歴任。農村ホームステイの受け入れは2010年より携わり、毎年たくさんの高校生を受け入れている。NPO法人食の絆を育む会の理事も務める。

体は、市町村毎で体制は異なりますが、その多くは自治体職員が事務局を担われています。多くの市町村の職員の方たちもこの取組みは非常に公益性が高く、価値あるものだと思ってくれていることがなにより嬉しいです。また「農村ホームステイ」は浦幌町在住の近江正隆さんがこれまで牽引してきてくれました。近江さんは東京出身ですが様々な体験をされてきた中で、この「農村ホームステイ」の必要性、協同組合の重要性をこ十勝で訴えてくれ、私たち農業者も取組みをはじめる大きなきっかけになりました。

農村ホームステイという取組み。この取組みをさらに拡げていくことがいまこそ必要です。農業・農村とのつながりが希薄になってしまった今のこの時代に私たちが十勝に住み続け、そしてこの誇るべき大事な営みである農業を続けていくためにも、この農村ホームステイは不可欠な取組みです。そのためにはまず、私たち農家自身がこの取組みへの考え方を変えていく必要があると思います。「受入は大変だからやらない」とか「受入が大変だからやめる」とかじゃなくて、私たちにとっての「農村ホームステイ」はもう仕事の一部なのだと思います。「仕事」とは生きていくために欠かせないこと。日々の営農作業は大変なこともいっぱいあります、でもそれは続けていきます。なぜなら生きていくために欠かせないことだから。この農村ホームステイも同じです。大変なことも確かにあるけれど、続けていく。その中で、私もそうですが、子どもたちとの交流から「感動」や「やりがい」を感じ、受け入れが楽しくなってきます。こういう取組みがもっと仕組化して、国民の半分が昔みたいに農村に住む我々と家族のようにつながったら、どんな未来が待っているのでしょうか？考えただけでもワクワクしてきます。「なんでこんな当たり前のことが伝わらないんだ！」って、いま藻掻いていることが案外単純に解決されるのかも知れません。そしてもうひとつこの活動を拡げていくためには、管内二十四ある農協や連合会・中央会という組織との連携・協働が不可欠です。二十六年十一月にJAグループ北海道では、改革プランの事業項目として、「国民への農業理解」の促進をあげ、具体的なアクションプランとして「農村ホームステイの推進」を掲げました。これは画期的なことです。下地は整ってきていると思います。あとはそれぞれの農協がいまのこの「食の絆を育む会」の動きとどう連携していくかがカギです。そしてどう役割分担をしながら実行していくか。私はこの十勝から大きなうねりをこの国に起こしていきたいです。そして、協同組合の存在意義を今こそ示したいです！先人たちから引き継いだこの大事な営み、そしてこの地域を未来に引き渡していくために、いまこそ次の百年に向けて種を蒔く時なのだと思います。

黒田承継

写真右後ろより、お父さんの石橋典之さん、旦那さんの啓真さん、そして沙織さん。写真右前より次女の志亜ちゃん（1才）、長女の陽向ちゃん（5才）、長男の蒼来くん（3才）。高校生の受け入れは、今年で6年目。近くに住んでいる弟さん夫婦も受け入れに協力してくれています。

受入のきっかけは？

「旦那さんが高校生の頃にもお父さんが農村ホームステイの受け入れをしていて、その時受け入れた子どもたちが、大きくなって遊びに来て、昔の話をとても楽しそうに話していたんです。それを見て、お腹に子どももいて不安だったんですけど、そういうことも残せるならやってみようかな～と思ったのが始まりです。」

子どもたちも大はしゃぎ

「高校生を迎えに行った帰りに、子どもの保育所のお迎えに行くこともあります。子どもたちがいると、とっても助かります。話の糸口がつかめない時でも子どもたちが軽くクリアして、私たちの橋渡しをしてくれるんです。」

いつものお決まりメニュー

「夕飯はカレー、昼は焼肉とだいたい決めています。カレーは高校生が色々な野菜の切り方をするので面白くて。たまにピザを焼いたりもしますが、メニューを決めておくと気持ちが楽になるんです！」

もう、はなさな～い

「退村式では、陽向が高校生の足にしがみつき、離れないこともありました。
高校生に出会うことで、楽しかったり嬉しかったり別れを惜しんで悲しんだり…
子どもにとって大きな成長に繋がっています！！」

迎え
買い物
到着
の畑で野菜を収穫
準備（順番におふろ）

、真っ暗を体験

度、準備
体験・見学
準備

帰る支度
出発

「お疲れさん会」を開催！！

もなんでも任せちゃったら
し、気持ちも楽になるよ！」
っていましたが、今度からは
！」

帯広の石橋沙織さんに聴きました。
高校生が来てから帰るまでの「ありのままの農村生活」

石橋家の農村ホームステイ

高校生が来ることでお部屋がピカピカ

「まだここが終わってな〜い！！と言って、高校生が来る日はバタバタで…でも夫婦で分担して大掃除。高校生のお陰で部屋がきれいになって、お父さんにもほめられます（笑）」

ご近所さんにHELP

「自分のところで作っていないイモやアスパラを、ご近所の農家さんの所へ行って収穫させてもらっています。また、酪農家さんの家に行って牛を見せてもらったりもしています。ほんと、近所の方たちに助けられているんです。」

こんなことでも感動

「夕食後、外に出て道路に寝そべり星空を眺めます。真っ暗な夜、まっすぐな道、信号のない道路…都会にはないものに驚き、感動してくれます。」

「人参を引っこ抜いただけでも喜んでくれる。獲れたての野菜を『美味しい！』と言って食べてくれる。『本当に帰りたくない』『こんな家族になりたい』と言ってくれる。当たり前だと思っていた自分たちの生活が、実は当たり前じゃないということに気づかされました。高校生からもらうことの方が多いんです。」

〈1日目〉

15:00	入村式
	保育所
16:00	夕飯の
17:00	自宅に
	ご近所
18:00	夕食の
19:00	夕食
20:00	外に出
	団らん
23:00	就寝

〈2日目〉

7:00	朝食
8:00	作業の
	農作業
11:00	昼食の
12:00	昼食
	団らん
14:30	自宅を
15:00	退村式

その後・・・

その年の受け入れが終わるとご近所の受け入れ農家さんが集
半分のお母さん方が大変だったという感想の中・・

先輩お母さん「私はほとんど高校生にやらせてるよ。茶碗洗
意外とみんな出来るもんだよ。そうすると楽

沙織さん「今まではやってもらうことが申し訳ないなあ
高校生にどんどん手伝ってもらおうと思いま

高校生から届いたたくさんのありがとう

農作業のときの、ゆりねを獲ったのも初めて経験したんで、楽しかったです。スーパーで北海道産のゆりねを見つけたときは、もしかしてって思ってめっちゃ親近感わきました。他にも、芽室産のポテトチップスが売ってて思わず買っちゃいました!!めっちゃ美味しかったです。大阪に住んでいるから、北海道の天気とか関係ないのに、ついつい見てしまって「北海道、寒っ」とか言っちゃいます。お陰様で北海道が身近なものとなりました。いつの日か必ず再び北海道を訪れたいです。

朝、トラックでドライブに連れて行ってもらったときに、広大な畑がずっと先まで続いているのは、感動しました。8時くらいから始まったネギの作業は初体験だったので、ものすごく苦労しました。でも、この作業が終わったときの達成感はすごくて「これが仕事なんや」と実感しました。お別れのとき、僕たちの乗っていた車が見えなくなるまで手を振っていてくれたときは、とても嬉しかったです。たった一日だったけど、僕たちを本当の家族のように迎えていただき、本当にありがとうございました。

牛の赤ちゃんにミルクをあげた後、自分の指を吸わせてあげたとき、とても牛の赤ちゃんの力が強くてびっくりしました。このときに、お母さんが「これが生きるということ」という言葉がとても心に残って印象的でした。

先生から見た
農村ホームステイ

大阪府立市岡高校　山中先生

十月に農村ホームステイでお世話になりました。当初は期待と共に不安もありましたが、いざ始まってみると生徒の五感を刺激するものが十勝にあり、いつしか不安は消えました。五感に関する具体的な感想として、次のようなことが生徒から挙げられました。視覚は「空気がきれい」、「星がきれいで、夜は暗い」。聴覚は「風の音だけ聞こえる」。嗅覚は「土や牛の匂いがする」。味覚は「野菜が甘い」、「水がおいしい」。そして触覚は「土、自然、そして人と触れ合う」といったものでした。

自分達が日頃口にしているものが、どのようにつくられているかについて理解し、「生産者」と「消費者」という視点でつながるきっかけになったと思います。見ず知らずの誰かではなく、「十勝の〇〇さんが作ったものだ！」もしくは「自分たちが行った十勝産だ！」という気持ちは食べ物を残さずに大切にしたいという気持ちにつながることでしょう。さらに「いただきます」の背景にある、命を「いただく」という感謝の気持ちを再認識することにもつながったのではないかと思います。

今、人の評価（目）を気にしながら、いわゆる空気を読むことに神経をつかっている生徒が多くいます。そのような生徒たちにとって、先入観をもたずに、そのままの自分を無条件で受け入れてくれる大人がいることはどれだけ癒されることでしょうか。飾らない素朴な人柄・温かい家庭の雰囲気が、少し固まっていた生徒の心身をとかして開放してくれました。農村ホームステイ終了後、受け入れ家庭との別れ際の生徒たちの涙が何よりそのことを物語っていました。

今回の修学旅行を通じて担当者として、私は「バトンタッチ」という言葉を強く意識しました。

「親が子どもへ伝えること」、
「教員が生徒へ伝えること」、
「生産者が消費者へ伝えること」、
「消費者が生産者へ伝えること」など、次の未来を担う世代へ向けて、あらゆる場面で伝えることがあります。素晴らしい体験をした生徒が今後、自らの体験をもとに発信をしてくれることを期待します。

始まる「つながり」

写真上／椎茸で醤油煮を作り、生徒さんがラベルを作成してお土産に。写真下／写真撮影をお願いした際、「手つないじゃう？」と言って、ご夫婦で手を繋いでくれました。奥さん：「何年ぶりかねえ～！」旦那さん：「いやいや緊張するよ～（笑）」

「生徒さんの心をひらく素敵な笑顔」

新得町 しいたけ農家

石橋（いしばし） 裕子（ゆうこ）さん

取材にうかがった日は冬休みということもあり、次から次へとむすめさんの友達が遊びに来ては、笑顔で迎え入れていた石橋さん。ホームステイに来た生徒さんもこうして石橋さんの素敵な笑顔に触れることで、心を開いていくのかもしれません。

「売っているところでは、農家さんの苦労はわからないからねえ。ホウレンソウにしても何にしても、年中お店にたくさんの野菜が並んでいるのは農家さんの苦労と努力があるからなんだよねえ。それが分かると、食べ物を残すなんてできないよ。命の重みを感じて食べないと、いつか罰が当たる気がするんだ～」と話す石橋さん。

水槽に原木を入れる作業や、湿度調整のために原木の位置を入れ替える作業等、重労働の多いしいたけ栽培。そんな作業を生徒さんたちと一緒に行った時、「これを一人で全部やったらつらいよね～」と生徒さんがつぶやいたそうです。

石橋さんは、自分の想いが伝わったその瞬間が何よりも嬉しかったと話してくれました。

そんな石橋さんのお宅に届いた、生徒さんからの一通のお手紙をご紹介します。

『生産者』だからこそ伝えることができる。農家さんが発する言葉には、農家ではない人間には到底伝えることのできない、『言葉の深み』があるのだということを、このお手紙が物語っています。

写真／しいたけハウスにて

［石橋裕子］さんとご家族の方へ

短すぎる時間、でも、今までにないほど濃い時間を一緒に過ごさせて頂き、本当にありがとうございました。私は農家になりたいと思うほど農業が好きで関心を持っていました。しかし、あの2日間で自分の考えの浅さや、食べ物を作ることの重みを痛感しました。しいたけの作業も、やらせてもらった何百倍も大変なことだと思います。夜にお話して下さったことが何よりも私の心を打ちました。将来、何の仕事に就きたいかを聞いて下さったとき、はっきりと言えなかったことが心残りでした。ですから、ここで、言わせて下さい。私はやっぱり農業と関わってまきていきたいです。「本当に大変なのよ」とお話されてもやはり、農業に近づきたいです。人は、最低限、食糧がなければ生きられない。だから私は、人間の根底を支えることに力を尽くしたいのです。退村式ではボロボロ泣いてしまうし、全く根情の足りない私です。こんなようでは、自然と向き合ってはいけないと思います。高校、そして大学で、もっと鍛えて、夢を実現できるよう努力したいです。私は「経験することに無駄なことは何もないから、何でもやってみること」という石橋さんの言葉を忘れず、人まに失望することなく、いつも前を向いて、生きていきます。本当に、沢山の感情を

ありがとうございました!!

※このお手紙は、生徒さんの了承を得て掲載しております。

－けんちゃんの心の変化－

石橋さんのお宅は、旦那さん、娘さん二人の四人暮らし。「ここ数年の受け入れで一番変わったのは、けんちゃん（旦那さん）だね。」と話す石橋さん。

石橋さんは、「行って良かったなあ～」と、泊まった生徒さんが思ってくれているかいつも不安に思っていたそうです。そのことを生徒さんに伝えると、「そうなんだ～。でもうちらも一緒で、お世話になった農家さんが喜んでくれているのかなあ？って心配だったんだ。」と。

その生徒さんの言葉を聴いた旦那さんは、緊張するのも不安になるのも「お互い様だ」ということに気付き、気持ちが楽になったそうです。最後に「緊張するけど、今度はどんな生徒さんがくるのかなあ？って楽しみなんです」と嬉しそうに話してくれました。

ホームステイから

「ホームステイをした生徒さんは みんな我が子のよう」

清水町 酪農家

西山 幸子（にしやま さちこ）さん

今までホームステイをしたたくさんの生徒さんの写真を一枚一枚見ながら、「この子は、そこに寝そべって、洋服のボタン縫って〜って甘えてきた子だね」「この子は先生になりたいって言ってたけど、どうしたかな〜？」「この子はつなぎを裏返しで着ててね〜」「この子は本当に虫が好きで」・・・と本当に自分の子どものように、やさしい笑顔で色々とお話をしてくれました。

写真上／いつもデスクに生徒さんからもらった色紙を飾り、ニヤニヤしているそう。 写真下／西山さんの牛舎にて。

「これ、食べられなくてね…」と言って見せてくれたのは、ホームステイをした生徒さんから届いたリース型にラッピングされたクッキー。

その生徒さんについて、「この子はね、特別目立つ子ではなくて、大人しい子だったね…でも、いろんな子がいるからね。その子なりに何か思って過ごしてるんだろうなあ、と思って。だから私はそういう子に対して、どんな子かな、どんな子かな、って観察するんだよね。」と西山さん。この生徒さんを受け入れたのは六月。その時は、思い思いに自分たちで蒔いた種から育った野菜を、秋に生徒さんに送ってあげたそうです。

その生徒さんから、お礼に届いたのがこのクッキー。そこには、お母さんからのお手紙も添えられていました。

「夏には本当にお世話になりました。そして、秋には、みごとに育ったたくさんのお野菜をありがとうございました。お礼が大変遅くなりまして、申し訳ございません。息子が『クッキーを手作りして送りたい』と申したもので、それを待っているうちに十一月です。一年生の時は、二学期から不登校となり、二年生に進級できるかもわからず、そんな状態だったものですから、北海道に行けたことは、本人にとりましても、また親にとりましても、ひとしおでした。どうにか、今年、二学期もほとんど欠席なく登校しております。まだまだ手放しにはいきませんが。」と、書かれていました。

西山さんはクッキーを見つめながら「この子がメールで『僕のクッキー美味しかった？』って聞いてきたんだよね。早く食べなきゃね…」と。西山さんのクッキーにそそぐまなざしは、まさに、かわいいかわいい大切な我が子を想う『母』のようでした。

今日も笑顔で、我が子と接するように、牛たちに話しかけている西山さん。「まだ来たことは無いけれど、いつ来るかな？会いたいなあ。」と今年届いた生徒さんからの年賀状を見ながら話してくれました。受け入れた生徒さんが、少し大人になって西山さんのお宅を訪れるのも、もうすぐかもしれません。

・・・最後に・・・

西山さんに無理を言って、お母さんのお手紙をNPO事務局に送っていただいた際、西山さんの「生徒さんのお母さん」に対する想いも添えられていました。

『子を想う親の気持ちというのは、本当に本当に海のように深くて春の陽差しのように暖かいのだと思います』と・・・。

写真／生徒さんから届いたクッキー

ーこんな話もしてくれましたー

「ホームステイにしても、人が来ることに対して拒否反応を示すんじゃなくて、まず受け入れてみるのが大事なんじゃないかな？だって、子どもたちはいろんなことを教えていってくれるもん！あ〜そうなのか!!ってこっちが気付いたり。日本の農家がどんな想いで作っているのかを伝えるためには、まずは自分たちが歩み寄っていって、自分たちから伝えようとしなかったらわからないんじゃないかな？」

「お母さん、また来るね！！」

そんな声が響く退村式。

たった一泊の農村生活。でも、一生の思い出。

今年も十勝に3000人の高校生がやってきます。

次の百年のために一緒に種蒔きを始めませんか？

製作・発行　ＮＰＯ法人食の絆を育む会

〒089－5601　北海道十勝郡浦幌町字宝町53－26

TEL：015-578-7955　FAX：015-578-7956

E-mail：info@shokuhug.com

Web：http://www.shokuhug.com